

海に根付いた文化

沖縄が琉球王朝として 15 世紀から 19 世紀まで独立国家だったときに、慶良間諸島は沖縄と中国の間を行き来していた船の中継地点でした。財を成していた人々は、中国貿易であれカツオ漁であれ、常に海を商売の道具にし、分厚いサンゴ礁の石垣の伝統的な家屋は、「船頭の家」として知られていました。古い大邸宅が一つと、いくつかの巨大なサンゴ礁でできた石垣が残りましたが、第二次世界大戦の終盤に集中爆撃を受け、この島の物理的遺産の多くが破壊されました。

祭りとボートレース

にもかかわらず、慶良間の伝統文化や風習は栄え続けています。各村には今も、御嶽（うたき）と呼ばれる古来の神聖な場所や、拝所（うがんじゅ）と呼ばれる祈りの場所があり、海との特別な関係が、一年を通して一連の祭りで祝われます。座間味島には、次のような祭りがあります。島の女性の健康と幸せを祈る浜下り祭りが、満干の差が最も大きい旧暦の 3 月 3 日に催されます。6 月にはサバニ帆漕レースが開催されます。伝統的な沖縄の漁船（6 人の男性が乗る帆掛け船）に乗って、海の神を鎮め、大漁と島の漁師の身の安全を祈るため、レースをします。ウミウガンは旧暦の 8 月に催されます。この行事は一年間の感謝と今後の航海安全、大漁を祈願して各集落のうたきにお祈りします。